

## 「第39回黒門祭」

6月24日から3日間、生田キャンパスで『牙をむくファシズム 批判的文化的剣を抜け!』をテーマに「第39回黒門祭」が開かれた。



ソフトボール大会で優勝したY・Kクラブのメンバー



漫画研究同好会の作品展

## ニュース専修ウェブ版をリニューアル

毎月18日前後に更新している「ニュース専修ウェブ版」を、より見やすいフォーマットでリニューアル！ 連載記事やバックナンバーへのアクセスもスムーズになりました。どうぞクリックしてみてください。



## 生田キャンパスに生田10号館（仮称）建設へ

生田10号館（仮称）の建設計画を策定するために、2004年（平16）12月に発足した「生田キャンパス10号館（仮称）建設推進委員会（議長・商学部長大西勝明、常務理事白根修）は、「学生を基本に据えた大学づくり」を念頭に審議を重ね、「生田10号館（仮称）建設推進計画」を本年4月27日、出牛正芳理事長へ答申した。この答申に基づき、専修大学理事会は07年（平19）4月からの利用開始を目標として、建設工事を推進していくことを決定した。【答申の概要は次のとおり】



生田キャンパスの生田10号館（仮称）建設予定地

### 1. 建設推進計画の概要

#### (1) コンセプト

生田10号館（仮称）（以下、仮称は省略）のコンセプトは以下の五つである。

- ① 創立130年を迎える専修大学を社会に強くアピールする建物
- ② 学生本位の教室を主体とした校舎
- ③ 建物間の連携と「社会知性の開発拠点」の強化
- ④ ゆとりと創造の場の確保
- ⑤ 個性と共生の尊重

すなわち10号館は、教室の整備拡充の必要性や通学路における急坂の解消など、生田キャンパスの持つ課題に対応することはもちろんのこと、7号館、8号館、9号館と有機的に連携することで四つの校舎が機能を補完し、学生の知的創造の場となることを目指している。まさに10号館は、社会知性の開発の新しいシンボルとなる画期的な建物であり、力を合わせて、厳しい時代に挑戦しようとするスピリッツが託されている。

#### (2) 校舎の規模と建設予定地

10号館は5000人以上収容可能な地下1階地上6階建てのL型校舎（延床面積約2万1000m<sup>2</sup>）として設計される。建設地は現野球場を予定している。

### 2. 施設の主要機能

#### (1) 教室

講演や各種行事にも対応することが可能な600人教室（1室）を始め、300人（5室）・233人（1室）・108人（10室）・72人（16室）の各教室のほか30人及び24人のゼミ室（32室）など、最新のAV機器が導入された斬新な設計による教室を設ける。

#### (2) 情報提供スペース・情報アクセススペース

特に、1階には情報コアゾーンを設け、学生が大学からの情報を受信し、外部の情報にアクセス出来る機器を設置する専用の空間を確保している。

#### (3) アメニティスペース

各所にホワイエ（ロビー）を設けることで、建物にゆとりを持たせるとともに、アカデミーモール等を設けることにより、学生のための集いの場や創造的な空間を提供する。また、障がい者、女性に配慮した校舎とするため、パウダールーム、トイレ等についても工夫を凝らす。

(4) レストラン(カフェテリア)

4階をレストランの予定階として設計しているが、広いレストランの他、テイクアウト可能な部分を区分けしたスペースの設定も計画している。学生や教職員の食事時間、嗜好等多様なニーズに応えることの出来る形式で食事、喫茶を提供することを課題としている。

(5) 研究室

2号館研究室の代替として研究室48室を設けるが、将来、総合研究棟が完成した後は小教室・ゼミ室への転用が容易に出来る仕様とする。

(6) 教員スペース

10号館を利用する教員、特に研究室を持たない兼任教員が利用出来る控室を設置する。

(7) その他

10号館は小田急線向ヶ丘遊園駅に最も近い場所に位置することから、徒歩ルートによる新正門としての役割を担うことになる。また、1階から4階にエスカレータを設けるが、このエスカレータは7・8号館方面への動線も兼ねる。

## 専フィル 第18回サマーコンサート

6月24日、専修大学フィルハーモニー管弦楽団の第18回サマーコンサートが川崎市多摩市民館大ホールで開かれた。指揮に米崎栄和さんを迎え、約500人の聴衆が梅雨の憂いを吹き飛ばす演奏を楽しんだ＝写真。



(撮影・多摩スタジオ)

シベリウスの交響詩『フィンランディア』、グリーグの『抒情組曲』と、北欧の調べを紡いだ後は、シューベルトの大曲、交響曲第8番『ザ・グレート』。積み上げられた弦楽器の響きは、ホルンをはじめとする管楽器の高らかな旋律と交わり、その豊かな広がり、日ごろの練習の成果を十分に感じさせた。アンコールはドボルザーク『スラブ舞曲第1番』で、12月の次回演奏会にて予定のドボルザーク交響曲第9番『新世界』へのプロローグを感じさせた。